

あの大きさのステージであれだけの表現をできるのが本当にすごいと思いました。小道具や何から何まで本当に手が込んでいて見て楽しかったです。

出演者全員が体全体を使って楽しそうに役を演じているのが、顔がはっきり見えなくても後ろの方の席まで伝わってきた。話の内容自体もすごく面白くて自分と主人公を重ね合わせて見ていたから言葉一つひとつが心に刺さってきた。

「俺を育ててくれたたくさんのおかけだよ」という言葉が心に残りました。重症の熊徹を残して、一郎彦を追いかけてしようとした時に百秋坊や多々良に言った九太のセリフです。

「俺も間違えていたら、一郎彦のようになっていたかもしれない。そうならずに済んだのは、俺を育ててくれたたくさんのおかけだよ。だから他人事にはできないんです。一郎彦の問題は俺の問題でもあるから。」

九太の気持ちがよくわかりました。何かを教えるということは教えた相手が成長するだけでなく、教えた人が成長することを改めて実感しました。

僕は人間もバケモノと見た目が違うだけで中身が同じだと思いました。

お化け屋敷でも2回、3回と入ればなれてしまう。バケモノも人間のことをよくわかっていないからこわいのだと思う。でも人間(一郎彦や九太)と暮らして、人間がどういふものかを知ったから人間と暮らしていけるんだと思った。



九太と熊徹の剣術修行

©2015B.B.F.P.(撮影者:阿部章仁)

私が感動したシーンは、白鯨との戦闘シーンです。この場面を見たとき、多彩な動きに驚き、そして感心しました。何故、あんな大きい物を機敏に動かすことができるのか、何故あんなにも動きがまとまっていたのか、そこに相当な鍛錬と努力が感じられました。

私は九太と楓の出会いが印象的でした。劇の最後の方で、楓が「みんな闇を持っているから死なないで。」や「一人で抱えこまないで。」という言葉から、楓の九太への思いが感じられ、そういうことを言える関係っていいなと思いました。



宗師の座をかけて熊徹と猪王山の試合開始

©2015B.B.F.P.(撮影者:阿部章仁)

九太と一郎彦の違いは、自分が何者か分かっているか分かっていないかだと思います。

現実に私たちが生きている世界でも、これは大事なことだと伝えているのではないかと感じました。今回このミュージカルを見て、バケモノと人間の親子の絆とそれを表現する演技力のすごさに感動しました。歌と踊り、それと声の力強さがとてもすごかったです。今回劇団四季を見て良かったです。他の作品も見たいと思いました。



(撮影者:石川敦史)

独りぼっちなバケモノと少年が共に成長していく姿にとっても感動しました。

特に印象的なシーンは、九太が掃除や料理など基本的なことをバケモノたちから学んでいく姿です。九太と初めて会ったときに、人間である九太をはぶいていたバケモノたちが九太のことをお世話している姿がほほえましく、見てうれしくなりました。

ラストシーンでは熊徹が神に転生して九太を救う判断をしたことに衝撃を受けました。

人間は誰かに助けられ、そして他の人を助けることを繰り返すことで成長して心も体も強くなっていくことを改めて感じる事ができました。

この作品を通して、自分自身と向き合える人間こそが真の強さをもっていると気づかされた。

特に九太は行き場のない状況だった幼少期のころから個をしっかりと持ち、常に自分の環境を自分で切り開いて来た。一見するとかわいそうな状況にあると思われるかもしれないが、後ろを向かずに前に進み続ける人の周りには親同然の温かい存在がついてくる。そんな人の周りには良い人間(バケモノ?)が寄ってくるのだ。

私たちは全員、それぞれの環境でいろいろな問題を抱えている。しかし、環境を言い訳にせず、もがき苦しむ中でも必ず前進し、強さを持てるのだと思った。